

2024

TOPIC
01

この2年間で取り組んだ活動

行政機関や地域、企業と連携し、シンポジウムや各種イベントの開催など、さまざまな取り組みを進めてきました。知床のこれからを考えるうえで、この2年間は確かな礎となりました。

知床国立公園指定 60 周年

世界自然遺産登録 20 周年を迎えて

文 村田 良介（公益財団法人 知床財団 理事長）

節目の年を迎えて

知床は2024年に国立公園指定60周年、2025年に世界自然遺産登録20周年を迎えました。

今回の特集では、知床のこれまでを振り返りながら、この2年間で知床財団が取り組んできた活動についてご紹介します。

知床らしさ

古い話になりますが、1958年の網走国定公園を指定する時に、知床を含めて「オホーツク国定公園」にしようという計画があったそうです。しかしこの当時は「網走の湖水と平和的な美しさに対し、知床は海岸と山岳の美しさというように性質が異なる」とされて実現しませんでした。これには「知床こそ日本に残された唯一の秘境であり、将来の国立公園に間違ったものだから、徒らに指定を急ぎ俗化させてはいけない」という元北海道大学教授、館脇操氏の助言も影響したと斜里町史に

記されています。このように、知床は60年以上前から「知床らしさ」にこだわってきた地域でした。その背景には、1958年の斜里からウトロの道路開通によるバス運行によって観光客が増えはじめたこと、さらに1960年には知床半島を舞台にした映画『地の涯に生きるもの』の全国上映などで「秘境・知床」が一気に有名になったことが挙げられます。

その後、満を持して1964年6月に知床国立公園が誕生しましたが、その当初から特別保護地区の面積が半分以上を占める「自然環境の保護を前提とした国立公園」として、他とは一線を画した位置づけがなされていたのです。

このような識者の「希望」や他の国立公園との差別化の考え方は、40年後の世界自然遺産登録にも引き継がれ、特に自然と漁業・観光などの地域産業の共存、野生動物・植物の保護と人の利用など、自然と人の関わりが重視され、今に至っています。

02
9月14、15日
「SHIRETOKO Adventure Festival 2024」開催
1月30日
「世界自然遺産・知床の日 記念シンポジウム」参加

斜里町・羅臼町と包括連携協定を締結している
アウトドアブランド企業と協力したイベントを実施

02

SHIRETOKO Adventure Festival 2024 開催



株式会社ゴールドウイン、株式会社スノーピークと連携したイベントを2日間にわたり開催しました。映像ホールを活用したバンフ・マウンテン・フィルム・フェスティバルの上映や写真家・石川直樹氏、アドベンチャーレーサー・田中陽希氏とのトークイベントやアクティビティツアーのほか、キャンプ場では地元の方による料理が振る舞われました。

01

“直木賞作家”と共に考える知床の自然

知床国立公園指定 60 周年 記念シンポジウム 開催



2024年に書籍『ともぐい』で第170回直木三十五賞を受賞した作家・河崎秋子氏をお迎えし、「100年先まで続く人間と自然のありかた」をテーマにご講演いただきました。後半には地元ガイドや高校生、知床と深く関わる企業の方にもご登壇いただき、「人と自然との距離」についてディスカッションを行いました。



▲バンフ・マウンテン・フィルム・フェスティバルの上映やトークイベントの様子

周年を記念し、公式
ホームページが作成
されました



▲キャンプ場にはアウトドアブランドのテントが並び、地元住民による料理が振る舞われた



60周年、20周年を記念した新たなロゴが制作されました。60と20の数字の下には知床を象徴するヒグマとシャチをモチーフにしたデザインが施されています。



周年事業を記念した切手を制作し、販売しました。また、海洋ゴミから作られたフライングディスクなどスペシャルなアイテムを通して知床内はもちろんのこと、地域外でも繋がりを演出しました。

新たな課題

知床を取りまく社会は大きく変化しています。



理事長 村田 良介

知床は遺産登録にあたってユネスコの調査・審査機関である国際自然保護連合（IUCN）から次の4つの指摘を受けました。①海洋生物の保護と漁業活動との両立、②増えすぎたエゾシカの対策、③陸と海の生物相をつなぐ河川に設置されたダムの改良、④エコツアーの普及、です。知床の抱える課題はこれだけではありませんが、これらの指摘については地域団体と行政機関による「知床世界自然遺産地域連絡会議」と専門的な立場から助言する「知床世界自然遺産地域科学委員会」を中心に検討されて具体的な対応が進められてきました。

一方で当初予期しなかった新たな課題も生まれています。具体的には2023年の知床遊覧船事故

創造とチャレンジ

この節目の2年間に、講演会やシンポジウム、啓発グッズの制作、さらにはキャンプライベントなど多様な取り組みが行われました。さらに日本の世界自然遺産の5地域とともに大阪・関西万博で知床を世界に発信する機会もありました。また、賛助会員や企業の皆さまからはこれまで以上のご支援や協働のご提案をいただいて活動を進めることができました。

知床財団は1988年の設立当初から、国立公園や世界自然遺産

と共に歩み、独自の事業にも邁進してきました。昨年11月には知床財団が主催となり、関係行政機関や地域連絡会議と連携し、20年間を振り返る「知床シンポジウム」を斜里町で開催しました。これを踏まえ、2月28日には科学委員会と連携した総括的なシンポジウムを札幌で開催します。これを通して世界自然遺産と地域産業の関わりをより具体的に探り、さらに科学的な立場から知床を俯瞰する必要があると考えています。

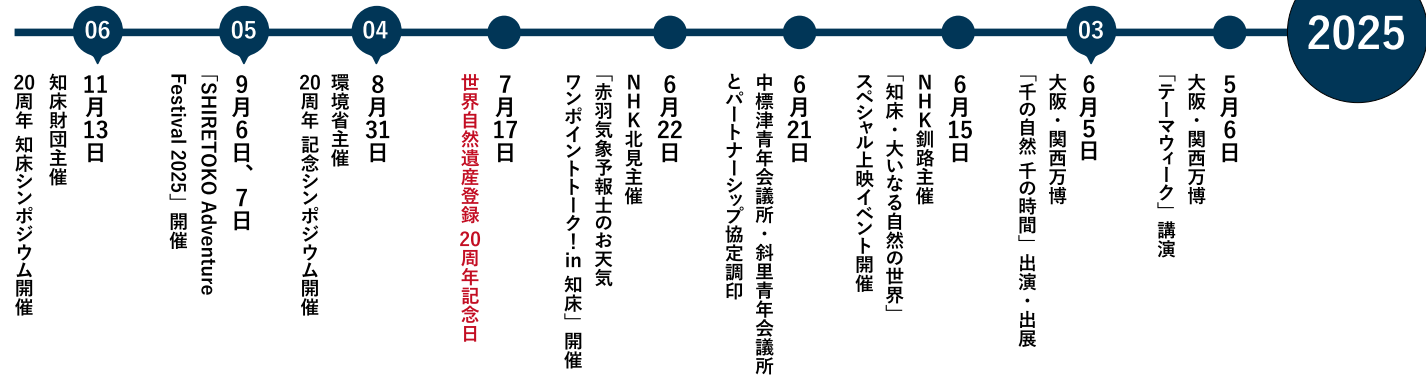
知床の次の新たなステージは、これまでの成果を振り返り、知床が創造とチャレンジの場であり続けることではないでしょうか。

2月28日のシンポジウムは、オンライン配信も実施予定！

詳細はこちら ▶



知床世界自然遺産地域連絡会議や知床世界自然遺産地域科学委員会についてはこちら ▶



日本初記録の生物を知床沖で発見した
海のスペシャリストを交えたディスカッション

04

世界自然遺産登録20周年 記念シンポジウム 開催



アクアマリンふくしまの松崎浩二氏をお迎えし、知床の海について理解を深めました。後半には、屋久島町長や移住者、地元高校生を交えて、「知床の海から考える、私たちの未来とアクション」をテーマにディスカッションを行いました。

“地元”に焦点を当てた知床財団主催の
シンポジウムを実施

06

20周年 知床シンポジウム 開催



観光や漁業など地域のくらしと産業に深く関わる方々にご登壇いただき、世界自然遺産登録からの20年の歩みを振り返りました。オンライン含め、約140人の方にご視聴いただき、地元の皆様と知床が抱える今後の課題について考える場となりました。

03

国際的なイベントで日本の世界自然遺産5地域が
集まり、各地域の魅力を世界へ発信

大阪・関西万博に登壇



大阪・関西万博では、知床の取り組みや直面する課題について発表しました。また、一部ブースでは本イベントのために制作した知床半島を模したパネルを展示し、世界各国から来場した方々に知床の魅力を発信しました。

昨年度とは異なる新しい視点を取り入れた
イベントを開催

05

SHIRETOKO Adventure Festival 2025 開催



2024年度に続き、Shiretoko Adventure Festival 2025を開催しました。今年度は茅葺職人とともに笹を使った体験型アートの創作や、間伐材や海洋プラスチックを使用したワークショップなどを実施し、斜里町・羅臼町共に幅広い世代の皆様にお楽しみいただくことができました。

知床財団 活動日記



しゅまりないこ 朱鞠内湖アウトドア・フェスに参加しました！

10月18日、19日に、幌加内町の朱鞠内湖で行われた「朱鞠内湖アウトドア・フェス」に参加しました。

イベントでは、ヒグマの生態についての講座とオリジナルグッズの販売、そして普段は知床自然センターのみで上映している「THE LIMIT」の特別上映も行いました。あいにくの天気でしたが、ヒグマ講座は両日合わせて100名以上の方に参加いただきました。この講座のために近隣市町村からわざわざお越しくださった方も多く、クマに対する危機感の高まりを感じました。また、朱鞠内湖は釣り人に人気の場所でもあり、普段はなかなか接することのない方々と出会え、私たちにとっても貴重な機会となりました。

知床財団のスタッフは普段どんな仕事をしているの？
あまり知られていない日々の取り組みをご紹介します。



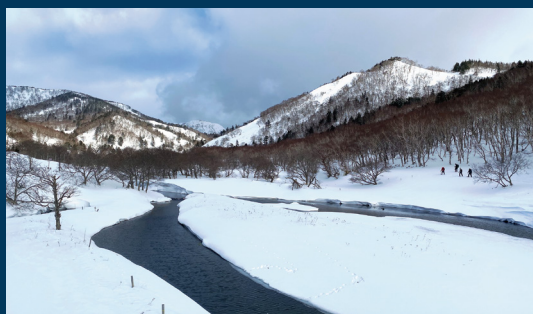
ヒグマ講座の様子



オリジナルグッズ販売の様子



ルサフィールドハウスの夏の様子



冬も自然は続いていく

たくさんの来館をありがとう！ ルサフィールドハウスは冬期閉館へ

今年はルサフィールドハウス開館以降、過去最高の来館者数を記録しました。

夏は涼しいと言われる羅臼も、2025年は30℃を超える日が続き、秋になってもルサ川にカラフトマスが遡上する姿がなく、環境の変化に戸惑いを感じるような年でもありました。

冬の間は休館となり、今は静かに佇むルサフィールドハウス。あらゆるものが雪で覆われる冬も、樹上にオジロワシ、林内にはシカの群れ、川面には健気に飛び回るカワガラス、水中にひっそりと棲むオショロコマがいて、春の訪れを待ちわびるシロザケの仔魚もいることでしょう。施設の休館中も、命の営みは途切れることなく続いています。

※世界自然遺産ルサフィールドハウス運営業務は環境省及び羅臼町からの受託事業です